

『琅』二十九号への手紙①

宗内 敦様

「琅」29号を送付いただき誠にありがとうございます。ありがとうございました。

今回も興味深く全編を読ませてもらいました。特に松村さんの「文学館散歩」、上野さんの「されど川柳」は、私の興味を強く引きました。「文学散歩」は、三島由紀夫のこともさることながら、文学館をめぐる散歩の情景が、臨場感があって、面白く読めました。

「されど川柳」は、飄々とした文体に感心し、また川柳をひねりだす心の動きなど勝手に想像して、人柄に親近感を持ちました。「文は人なり」で何回かその人の文に接すると、親しく知人に遭遇した感じになるものですね。

宗内さんの「戦争は人類究極の敗北」は、戦後70年の所感として、われわれの共通する考えだと思えます。文中、加害者か、被害者か、という見方はなるほどと思いましたが、戦争では、区別つかずといったところでしょう。戦前に生まれ、戦中を過ごし、戦後を生きてきた私たちは、戦争のない社会づくりを喧伝しないといけないのでしょうか。

謹啓

「琅」二十九号、ありがたく拝受しました。ご健筆、相変わらずですね。うれしい限りです。

大兄のご指摘通り、人類はちっとも賢くなりませんね。むしろ次々と「パンドラの箱」を開けているように思います。核兵器、遺伝子操作、ロボット等、制御できるのでしようか、心配です。

ご健勝、ご健筆を祈るや切です。御礼まで。 敬白

吉村久夫

拝復

霜降の季節となりましたが、お変わりなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。

過日は、「琅二十九号」をお送りいただき、ありがとうございます。いつも心に懸けていただいて恐縮に存じています。それに本号には、「琅への手紙」の中で、小生の拙文をとりあげていただき、また感謝のお言葉までいただいて、ただただ恐れ入っているところ

川合道朗 (2015.10.30)

わたしも囲碁と読書、それに庭いじりなど、好きなことをやって、時間をつぶしています。元気にいきましよう。

です。重ねて御礼申し上げます。

巻頭、先生の論説をざっと拝見し、平和と反戦の思いを掘り起こしていただいたのですが、ご承知のとおり小生今年卒寿にもなって、あまり深く考えたこともなく何となく年齢をかさねてきたことを恥じているところです。

小生、太平洋戦争開戦時は中学三年生で、その後、海軍機関学校（海軍兵学校舞鶴分校）に学び、終戦時は最高学年で、あと二カ月で戦争に出るという経験をしました。

この当時と現在を比べて、夢幻のような感じがします。

「琅」の継続を心から願うとともに、先生のご努力に感動しています。何卒、お身体大切にお過ごしください。乱文乱筆謝。

敬具

田中武平

拝復

先日「琅」第二十九号を落掌致しました。添へられた短信の中に「生き方を変えても

うひとふんばり・・・と御書きになつてをりますが、生き方をどう御変へになるのですか。小生は生き方を変えることが叶はぬまま、「もうひとふんばり」したいなどと考へてをります。ところで、編集者が貴殿から他の人に移つて、小生と「琅」のつながりは事実上終つたやうに感じられます。

これもまあ人生の一コマと言ふべきでせうか。 妄言當死 和田正美

和田正美

琅二十九号お送り下さり、まことにありがとうございます。貴兄の反戦の思い、全く同感です。山本さんのエッセイ、にかには信じがたい思いをいただきながら毎号読ませていただいています。

だんだん寒くなってきましたが、健康第一でお願いします。まずは御礼まで。

菊池 明

拝復

「琅」二十九号を恵送頂きましてまことに

有難う存じます。精魂込めての永年の編集のお仕事は、さぞ大変だったことでしょう。本当にご苦勞さまでした。しかし、初志を貫徹してここまで続けられたことはご満足かと存じます。

「評壇」の先生の文章は格調高く考えさせられるところ多く、感銘いたしました。次はぜひ辺野古問題を取り上げて下さい。政府の“地頭”ぶりと本土の傍観者ぶりに鉄槌を下してください。

山本様のエッセイも心に残りました。若々しい気概に溢れていてグサリと来ます。「住みたい国」はまさに国民全体の願いでもあります。私も小著をまとめつつありますが、これが最後の仕事かと思っています。お互いに“老いを自覚”し、その“限界”の中で頑張りましょう。

大久保廣行

「琅」二十九号拝受。いつも種々考えさせられます。永らく平和に安住してきた身が、ようやく死を身近に感じる年齢になって、

このまま安らかにというわけにはいかぬと思わせられる内外の世情に接して、気にはなりながら、いかに対応すべきか、・・・の無力に甘えて、結局は無為にすごしているにすぎない昨今です。評壇、二言三言、すべて同感。また今回は、編集を降るためか、*ならぬ老耆の葉書きなどまで取り上げてあり、照れ臭く・・・していました。書くのが怖くなりました。しかし、これから書き続けられる由、たのしませてください。当方も書ける間は続けようと思っております。今のところ、他に:::日本という国くらいしか読んでいませんが***よみ応えの***で、じっくり読まねばと思っております。 不一

古明地義勇

宗内 先生
二十九号「琅」有難うございました。次号からは次の方にバトンタッチなされる由長い間御苦勞様でした。何時も嬉しく読ませて頂いていました。これから先生の文

を読み続けることができますよう、お祈り致します。

また、つたない手紙を載せて頂き、感謝しています。

宝田さんのお話、早速、やはりお父様が満鉄勤務で新京から引きあげた、音大の同窓生に電話しました。本当に大変だったようです。

くさや、自分で焼いて、焼きたてを食べるのが美味しいので同封しました。来年四月、もう一度演奏会がらぼうと思っております。

廣江啓子

朝の散歩で公園内を通ると、彼岸花が真紅のじゅうたんのように咲き乱れている光景が見られます。深まる秋、いかがお過ごしでしょうか？

いつも「琅」をご恵送いただき、有り難うございます。早速に読ませていただきましたが、なかでも山本さんのエッセイは興味を持って拝見しています。「世迷い言」は

いうまでもありませんが、

山本さんの「百済民族」論でありませんが、現在の長野県松本市(旧南安曇郡、北安曇郡)では、安曇野伝説があり、それによると同地一帯はかつて「安曇族」という渡来人によって支配されていたようです。

同市近郊の波田町(旧波田村)・・・初等少年院があります。・・・は「ハタ系」の渡来人の村であったそうで、古代、中央王朝の威令も及ばなかったようです。現在も信州渡来人倶楽部という団体が松本市に存在しています。詳しいことは避けませんが、そんな事情もあって、山本さんのエッセイ興味深く毎回拝読している訳です。

永い間「琅」刊行に注力され、ご苦勞さまでした。

なお、私のことですが、今年身内に不幸がありましたので新年のご挨拶は失礼させていただきます。

朝夕は思いがけず冷える日もあります。末筆ですがご自愛ください。

白井 昭

宗内 敦 様

半年ほど以前より、毎日の温度を記録しております。最高気温24〜25度ぐらいが暮らしよい適温かと思えます。

「琅」二十九号ご恵贈いただき、有り難うございます。『戦争は、人類「究極の敗北」―戦後七十年、私の所感―』拝見いたしました。

私も敗戦時、まだ小学生でしたから、戦場の現場を知りませんし、学徒出陣、学徒動員などの事もだいたい後になって伝え聞いたに過ぎません。

私にとつての「戦争」とは、「甲府空襲」です。B28の重低音に脅え、家族一同がうずくまる前で焼夷弾が炸裂し、火の玉が頭上を越して障子、畳が燃え上がり、逃げ出しました。両親と、私を筆頭に末が生後五カ月の弟まで六人の子ども、八人でした。旧師範学校と旧陸軍兵舎とに挟まれた畑で、炎上する甲府市街を遠望しながら夜を明かしました。駅付近の倉庫に保管されて

いたドラム缶が次々と爆発し、ボツと上がった青い火の塊が瞬間赤に変化するありさまが、今も脳裏に鮮明です。

心臓がドキドキ鳴っていたはずですが、空襲の恐ろしさよりも、その後に過ごした四年間の疎開者生活が、私にとつての「戦争体験」であつたと、思っております。

家がない悲哀、飢餓、差別、イジメ:一方で血のつながらない他人からの過分な親切、厚意。私を認めてくれた教師たち、終生の友を得たこと:。苦楽、善悪、プラスマイナス取り混ぜて、強烈に印象付けられております。家を復興してからも貧困に悩まされ、どうやら生活を立て直せたのは、敗戦から二十年余を過ぎてのことでした。

もし、家が焼失を免れたならば、私の人生、個性、人間性、異なったにちがいありません。良かったか否かは別にして。

戦災者の戦後といえますと、どちらも似たようなものでして、苦しかったのは我が家ばかりではありませんが、平均的な(戦争者でも、とんだ苦勞を強いられました。

知り合いに「鐘の鳴る丘」の出身者がおりました。戦災孤児です。自分が何歳か正確には分からないのだそうです。善良な温厚な人でした。肝臓を病み度々入院し、それでもきつく止められていた酒が止められず、ついに亡くなりました。

私にはその人の、やるせない気持ちの奥底を、窺い知ることなど到底出来ません。飲めば死を早めると承知しながら、飲まずにいられたかった心の内が、ただただ哀しくてなりません。娘さんが生徒の一人だったこともありまして。

国内国外、戦争による被害者は多様です。私などはまだましであつたでしょう。

この八月、戦後七十年の節目、NHKのスペシャル番組がいくつも放送されました。戦場、原爆、空襲、満州からの帰国者、シベリア抑留者・・・いずれも苛酷で悲惨で、憤りを禁じ得ませんでした。この数年にも「兵士たちの証言」などの番組で、数少ない生き残りの人たちの告白を視てまいりました。戦争はいかに恐ろしい、非人道的なもので

あるかを、まざまざと見せつけられました。安保法制成立。我が国は七十年、戦争をしない国でした。若い世代の今後がどのようになるのかを憂慮しております。普天間の基地を辺野古へ移したところで、悲劇が場所を変えるだけのこと、沖縄の人々が基地の重圧から解放されるわけではありません。

そうでした。あのときの熱気からして、革新政権誕生必至かと見られていたのですが、蓋を開けますと自民党の大勝に終わり、池田勇人の天下となりました。

牛村圭氏の「書くように話すに如くはなし」、共感するところ大でありました。

「話す」と「書く」は別種である。しかし「書く」ことが「語り」によい影響をも

アメリカ追従は危険です。ベトナム、アフガニスタン、イラク・・・。私たちは真実（一端ですが）に触れておりますので。

たらず。は的を射た説です。書くことにより思考がまとまり、矛盾なく論じられると思います。ただし、書いたからといって、

近ごろ、「オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史」（ハヤカワ文庫）を読み、（一昨年、十回に分けて放送）一層危機感を強くしました。

「うまく」話せるようになるとは限りませぬ。聞く相手がおり、話す人の個性とか感情がからんでまいりますので。

来年の参議院選挙、注目しております。

数々の指摘、もつともです。私も文章に

ところが、「のど元過ぎれば熱さを忘れる」とでも申しませうか、一般大衆は移り気なものです。差し当たり安保法制がならんかの形で生活にかかわるわけではなし、身に不都合が起きなければ、「当たり前」になつてしまいます。六十年安保反対闘争が

親しむ一人として、常日頃留意しているつもりではありますが、なお足りぬところがあつたと反省し、今後の創作に役立てられるよう、しっかりと噛み締めてまいります。

蛇足ですが、私は現状維持に一応成功しております。八月の☺検査、十月の血液、尿検査とも、前回に比し変化なしのことでした。悪いなりに安定している、と解釈しました。腎臓障害ですから、栄養物が充分摂れず、体力の回復が思うにまかせませんが、焦らず、無理をせずと心掛けております。

秋は美しい、よい季節ではありません。しかしながら、必ずやってくる厳冬を思い出すと、つい気が滅入ってしまいます。

くれぐれもご自愛くださいますよう。

研文学会 依田 茂夫

（到着順）